2026 年 6 月 5 日

学校法人三幸学園
東京未来大学福祉保育専門学校
校長　中村　光一　殿

学校関係者評価委員会
委員長　松縄　和彦

学校関係者評価委員会実施報告

2025 年度学校関係者評価について、下記のとおり評価結果を報告します。

記

1　学校関係者評価委員
- ①　松縄　和彦　（社会福祉法人三幸福祉会　理事長）
- ②　有山　元治　（飛鳥未来高等学校　足立キャンパス　キャンパス長）
- ③　竹田　美鈴　（認定こども園葛飾みどり　園長）
- ④　根本　凛央　（東京未来大学福祉保育専門学校　2024 年度卒業生）
- ⑤　永井　知花　（東京未来大学福祉保育専門学校　2024 年度卒業生）

2　学校関係者評価委員会の開催状況
2026 年 5 月 26 日（会場　東京未来大学福祉保育専門学校　303 教室）

3　学校関係者委員会報告
以下「自己評価・学校関係者評価報告書」に学校関係者評価委員会コメントとして記載

以上

2025 年度 学校法人 三幸学園 東京未来大学福祉保育専門学校
自己評価ならびに学校関係者評価報告書

自己評価報告責任者 ： 副校長 末安由香
学校関係者評価報告責任者 ： 学校関係者評価委員会委員長 松繩和彦

1. 学校の教育目標

学園のビジョン「人を活かし、日本をそして世界を明るく元気にする」、ミッション「人を活かし、困難を希望に変える」のもと、福祉保育分野の学校として「福祉・保育現場に貢献することで、日本を明るく元気にする」というビジョンを掲げている。
また「技能と心の調和」を教育理念とし「素直な心、感謝の気持ち、高い意欲を持ち続け、自ら考え、自ら行動することで、社会に貢献する人材」、福祉保育分野として「豊かな人間と確かな技術で関わる人に、幸せや希望を提供できる人材」を育成する人物像とし、専門学校として社会・業界に求められる人材の育成を進めている。

2. 前年度に定めた重点的に取り組むことが必要な目標や計画

① 前年度重点施策振り返り

●学生満足度の高い授業

入学時の学校生活に期待する内容として毎年上位に挙げられる「授業」は、本校における人材育成の基盤であると捉えている。この認識のもと、学生一人ひとりの理解度や状況に配慮した授業運営と個別対応を重視してきた。

授業アンケート「授業は全体的に満足できるものでしたか。」の結果では、介護福祉科が 2024 年度 3.72 点から 2025 年度後期 3.78 点へ、保育科・こども総合学科も同期間に 3.59 点から 3.70 点へと向上している。授業内外での声かけや質問対応など、きめ細かな個別対応により学生が安心して学習に取り組める環境が整い、これが授業満足度の向上につながったと考えている。

●体系的な就職指導

学生一人ひとりの進路実現を支援するため、学科の特性に応じた体系的な就職指導に力を入れて取り組んできた。
その成果を確認するため、卒業生アンケート「就職指導は十分だったか」の結果を分析した。
介護福祉科では、2024 年度は 4 点満点中 3.65 と非常に高い評価であったが、2025 年度は 3.54 とわずかに低下した。この要因の一つとして、留学生の割合が増加したことにより、就職活動に対する理解度や文化的背景の違いから、指導内容の受け止め方に差が生じた可能性が考えられる。一方で、就職決定のスピードは非常に速く、年内には就職決定率 90%を超え、卒業式までに 100%の内定率を達成しており、就職実績の面では高い成果を上げている。今後は、留学生に対する就職指導のさらなる工夫や、理解を深める支援体制の強化が課題である。
保育科においては、2024 年度の 3.11 から 2025 年度は 3.36 へと評価が向上した。学生一人ひとりの状況や希望に寄り添った個別指導を重視したことが、満足度向上につながったものと考えられる。また、公務員試験対策については、継続的かつ計画的な指導を行い、学生から一定の評価を得ている。しかしながら、進路決定までに時

間を要する学生が多く、就職活動の開始が遅れる傾向が見られた。その結果、応募可能な求人の選択肢が減少し、チャンスを逃してしまうケースも課題として挙げられる。
以上のことから、体系的な就職指導は一定の成果を上げているものの、学科ごとの特性に応じた改善が必要である。今後は、介護福祉科では多様な学生背景を踏まえた指導方法の充実を図り、保育科では早期からの意識づけと行動促進を強化することで、より効果的で満足度の高い就職指導体制の構築を目指す。

●成長実感の高い学校生活
　学生が在学中に自身の成長を実感できる学校生活を送ることが、学校満足度の向上につながると考え、教育活動および学生支援に取り組んできた。
卒業生アンケート「この学校で成長することができましたか」の結果では、介護福祉科は 2024 年度 3.71 から 2025 年度 3.65、保育科は 3.63 から 3.56 と、いずれも高評価を維持しつつ、わずかな低下が見られた。
介護福祉科では、留学生や委託訓練生の増加により学生構成が多様化したことから、留学生が求める支援内容の把握不足や、年齢層の広がりへの対応が十分でなかった可能性が考えられる。
保育科においても、委託訓練生を含む幅広い年齢層の学生への対応や、学生間の人間関係トラブルへの支援が課題として挙げられる。
今後は、多様な背景をもつ学生一人ひとりが成長を実感できるよう、求められる支援の把握と学習・生活環境の充実を図り、より満足度の高い学校生活の実現を目指す。

② 学校関係者評価委員会コメント
・卒業生として、学生生活を振り返ってみると、技術的な面だけでなく内面的な部分でも成長を実感しながら卒業することができたと考えている。特に昨年 1 年間新入職員として働いて感じたのは、「可愛がられる人材」でいることの重要性である。社会に出て先輩方から教わりながら仕事を進めるにあたり、先輩の方からも“教えたい”と思われる人間性がなければ上手くいかない。技術面だけでなく内面、人間性の部分も指導し、成長することができると卒業後の満足度は高くなるのではないか。（永井委員：介護福祉科・保育科・こども総合学科について）
・卒業後、社会に出て感じているのは周囲の人と協力することの重要性である。介護現場に限らず、仕事をするうえで一人の力でできることには限りがあり、先輩や他職種の方と協力しなくては成り立たない。在校時は同じ目標を持つクラスメイトがいたから課題や実習を乗り越えることができた。そのような経験があったからこそ就職後も先輩方とのコミュニケーションを積極的に取るように意識している。また、卒業後も一緒に困難を乗り越えた仲間がいるということが自分の支えになっている面もあるので、学生同士の絆を深めるような取り組みは卒業後の満足度にもつながると思う。（根本委員 ： 介護福祉科・保育科・こども総合学科について）
・多様な背景を持つ学生が多く在籍しているとのことで、通信制高校出身の学生も増えているのではないかと思う。通信制では学校とのつながりを大切にしており、とにかく学校に来ることを重視して指導している。
文化祭などの行事に関しては、モチベーションの高い学生と苦手意識のある学生がいるので、それぞれに合った指導を行う。苦手意識のある学生に対しては、まずは参加すること、参加できるようになったら次の目標と、スモールステップを積み重ねていく。専門学校の指導においても、スモールステップを取り入れ、達成感、成長実感を与えていくとよいのではないか。（有山委員：介護福祉科・保育科・こども総合学科について）

3.評価項目の達成及び取組状況

(1)教育理念・目標

【評価項目】（評価＝適切：4、ほぼ適切：3、やや不適切：2、不適切：1）	評価
学校の理念・目的・育成人材像は定められているか（専門分野の特性が明確になっているか）	4
社会経済のニーズ等を踏まえた学校の将来構想を抱いているか	3
学校の理念・目的・育成人材像・特色・将来構想などが生徒・保護者等に周知されているか	4
各学科の教育目標、育成人材像は、学科等に対応する業界のニーズに向けて方向づけられているか	4

① 課題

福祉・保育業界へ人材を輩出する学校として、多様性を尊重できる人材、地域や社会に関わる当事者意識をもてる人材を育成することに対して、力を注いでいる。学内には国籍や年齢の違い等、多様性に触れる機会が多くある一方、地域や社会とのつながりを意識した学習の機会が少ない。

② 今後の改善方策

知識注入型の学びから「活用する学び」へ進化させ、そこに地域や社会とのつながりを意識させるために地域社会を題材にした学習を各科目に導入することを検討している。地域に開かれた学校づくりを目指す。

③ 特記事項

特になし

④ 学校関係者評価委員会コメント

・知識注入型の学びではなく「活用する学び」を目指すことはとても良いことだと思う。在校時にコツコツと作っていた保育グッズは現場に出てから実際に子どもたちの前で使用しており、反応も非常によい。働きながら一から作るのは大変なので、学生時代に沢山作っておくと現場に出てからの自分を助けてくれる。そうした経験を後輩達にも伝えたい。学生時代の経験があることで、現場に出たときに自信を持って人前に立つことができている。地域社会とのつながりの機会を多く作っていくことは、学生たちの将来のためになると感じているため、ぜひ前向きに取り組んでもらいたい。（永井委員：保育科・こども総合学科について）

・実習の際に認知症のある利用者様とのコミュニケーションの難しさに戸惑いや悩みを感じることが多かった。事前に認知症がある利用者様への声がけや対応方法を知っておくことができれば、実習中に悩むことも減り、現場に出てからの自信にもつながると思う。実習とは違う機会で学ぶ場を用意することはできないだろうか。そのことが地域や社会とのつながりを感じる学習機会にもなるのではないか。（根本委員：介護福祉科について）

(2)学校運営

【評価項目】（評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1）	評価
目的等に沿った運営方針が策定されているか	4
事業計画に沿った運営方針が策定されているか	4
運営組織や意志決定機能は、規則等において明確化されているか、有効に機能しているか	4
人事、給与に関する制度は整備されているか	4
教務・財務等の組織整備など意思決定システムは整備されているか	4
業界や地域社会等に対するコンプライアンス体制が整備されているか	4
教育活動に関する情報公開が適切になされているか	4
情報システム化等による業務の効率化が図られているか	3

① 課題

2025年度より、生徒への連絡事項や授業内資料などは Google クラスルームや LMS を活用し、ペーパーレス化を図るとともに、学生は授業内容のレビューを速やかに行うなど、学びの充実を図っている。また教員間の情報連携を強化するため、teams を活用した情報交換の充実を図っている。さらに活用を浸透させていきたい。

学校行事の実施資料や授業データの蓄積においては、昨年度より強化を図っているが、まだ不足している部分も多い。

② 今後の改善方策

授業準備の時間を削減する施策として、パワーポイント資料のデータ蓄積等を進めている。主に実習指導・就職指導の授業において全国の姉妹校の蓄積データを活用し、指導の充実を図っていく。また、AI を活用した授業の取り組みについても、推進していく。

③ 特記事項

特になし

④ 学校関係者評価委員会コメント

・AI の導入については、弊施設においても検討している。特に議事録作成への使用を考えているが、個人名が多く出てくることもあり、個人情報保護の観点から思うように導入が進められていない現状がある。個人名を伏せるためには職員のチェックや加工が必要となり、その手間を考えると上手く活用するには至っていない。（松縄委員：介護福祉科について）

・こども性暴力防止法の制定に伴って、園の方でも「人権セルフチェックシート」を月に 1 回行っている。全 50 項目あり、職員本人の回答と管理者側から見た実際の対応が異なっている職員に対しては面談を行っている。

近年男性保育士を取り巻く環境は厳しさを増しているかもしれないが、学生が自信をなくしてしまわないような指導を学校へ期待している。（竹田委員：保育科・こども総合学科について）

(3)教育活動

【評価項目】（評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1）	評価
教育理念等に沿った教育課程の編成･実施方針等が策定されているか	4
目標の設定として、教育理念、育成人材像や業界のニーズを踏まえた教育機関としての修業年限に対応した教育到達レベルや学習時間の確保は明確にされているか	4
学科等のカリキュラムは体系的に編成されているか	4
キャリア教育･実践的な職業教育の視点に立ったカリキュラムや教育方法の工夫･開発などが実施されているか	4
関連分野の企業･関係施設等、業界団体等との連携により、カリキュラムの作成･見直し等が行われているか	4
関連分野における実践的な職業教育（産学連携によるインターンシップ、実技･実習等）が体系的に位置づけられているか	4
授業評価の実施･評価体制はあるか	4
職業に関する外部関係者からの評価を取り入れているか	4
成績評価･単位認定の基準は明確になっているか	4
資格（免許）取得の指導体制、カリキュラムの中での体系的な位置づけはあるか	4
人材育成目標に向け授業を行うことができる要件を備えた教員を確保し、組織できているか	4
関連分野における業界等との連携において優れた教員（本務･兼務含め）の提供先を確保するなどマネジメントが行われているか	4
関連分野における先端的な知識･技能等を修得するための研修や教員の指導力育成など資質向上のための取組が行われているか	3
職員の能力開発のための研修等が行われているか	4

① 課題

･先端的な知識を学ぶ機会を学生全員には与えられていない。

･職員の能力開発のための研修等は実施しているものの、機会としては少ない。

② 今後の改善方策

･教員研修の機会を積極的に周知･実施する。

･外部講師等を招いての研修などを実施し、教員指導力育成の質向上、研修の充実を図る。

③ 特記事項

特になし

④ 学校関係者評価委員会コメント

･虐待などに関する法定研修や昨今の状況に合わせて SNS 研修などを行っている。全員を集めた対面型の研修は減ってきており、オンデマンド型の研修の導入が進んでいる。個々にオンラインで受講し、進捗管理も行うことができるが、対面よりも習熟度が落ちてしまうことが懸念点である。（松縄委員：介護福祉科について）

・介護の制度や情報はめまぐるしく変化しており、現場で働いていても把握しきれない部分がある。最新の介護知識や制度について学ぶ機会を用意し、それを教員だけではなく卒業生にも開放することはできないか。卒業後にも学校に来て学ぶ機会があることは、卒業生支援の面でも有効であると思う。（根本委員：介護福祉科について）

(4)学修成果

【評価項目】（評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1）	評価
就職率の向上が図られているか	4
資格（免許）取得率の向上が図られているか	4
退学率の低減が図られているか	3
卒業生・在校生の社会的な活躍及び評価を把握しているか	4
卒業後のキャリア形成への効果を把握し学校の教育活動の改善に活用されているか	3

① 課題

【介護福祉科】

留学生の増加に伴い、学習・生活・就職で多角的な支援方法が求められている。

国家試験合格率の伸び悩み

退学理由の多様化（国政・疾病など）

【保育科・こども総合学科】

目標喪失をする学生に対した支援・施策の考案

② 今後の改善方策

【介護福祉科】

入学前の状況確認と日本語能力目安の厳格化

国試対策授業外で補習導入と 1 年生後期からの国試対策授業を設定

【保育科・こども総合学科】

目標喪失の学生に対しては、業界を幅広くした複数の進路選択肢を提供し、保育＝幼稚園・保育園という概念を和らげながら支援を行う。

③ 特記事項

【介護福祉科】

実習関連施設への就職率上昇（50%超え）

③ 学校関係者評価委員会コメント

・目標喪失を防ぐという点は、企業としても重要なテーマである。効果があったものとしては、評価制度を変えて一対一の面談の機会を増やした。面談は評価者と行うものもあるが、現場で共に働く 2～3 年上の先輩と行う時間を多く取っている。悩みを話せる場と機会を作ることが目標喪失にも繋がるのではないか。また、プロセス目標として 3 か月や 1 年単位で目標を立てており、1 年かけて夜勤に入るようになる新人職員もいる。大切なのは個々に合った目標を作ることである。（松縄委員：介護福祉科について）

・勤務中の園は管理職と教員との関わりが密で、意見も伝えやすい環境が整っている。入職当初、職員室で話す先輩方の情報共有の輪に入ることができず悩んでいたときも、そのことを伝えると理解し、すぐに対応してくれた。伝えやすい環境と迅速に対応してくれる相手がいるということは安心に繋がるので、学生に対してもそのように接することが退学防止にもなると思う。（永井委員：保育科・こども総合学科について）

(5)学生支援

【評価項目】（評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1）	評価
進路･就職に関する支援体制は整備されているか	3
学生相談に関する体制は整備されているか	4
学生の経済的側面に対する支援体制は整備されているか	4
学生の健康管理を担う組織体制はあるか	4
課外活動に対する支援体制は整備されているか	4
学生の生活環境への支援は行われているか	4
保護者と適切に連携しているか	4
卒業生への支援体制はあるか	3
中途退学者への支援体制はあるか	3
社会人のニーズを踏まえた教育環境が整備されているか	3
高校･高等専修学校等との連携によるキャリア教育･職業教育の取組が行われているか	4

① 課題

【介護福祉科】

早期に保護者やスポンサー法人と連携する体制は確立されているものの、本科生に関しては保護者と学生本人との関係性に課題を抱えるケースもあり、介入が難しい場合がある。また、在学中の支援体制によって卒業に至ったとしても、就職後の体制のギャップとの乖離があり早期離職が少なくない。また、中途退学者の後追いは行えていない。

【保育･こども総合学科】

在学中の就職支援体制は整っているものの、卒業生の早期離職が一定数見られる。

② 今後の改善方策

【介護福祉科】

社会人として自ら考え、判断し、決定する経験を積めるよう、教員が意図的に機会を構築する。

【保育･こども総合学科】

就職先との関係性を構築し、卒業後のキャリアを把握できる仕組みを作る。

③ 特記事項

特になし

④ 学校関係者評価委員会コメント

･離職者を防ぐために他の園にはない制度も積極的に取り入れている。有休を必ず取得できるようにし、時間単位での休暇取得を可能とした上で、年間休日も増やした。人件費に投資することで、休みを取得しやすいという安心感を生み出している。また、休憩の 1 時間とは別に、「ノンコンタクトタイム」という子どもと関わらない時間も作ることで、職員が心地よく働くことができるよう環境を整えている。風通しの良い職場づくりも意識しており、事務所で職員が気軽に意見を言える雰囲気作りに努めている。職員が意見を出しやすいだけでなく、管理者はその意見を受け

止め、検討したり取り入れたりすることも大切である。働きやすい環境、自分に合った園を選べるように就職指導を行う中でその重要性を学生に伝えてもらうことを期待している。（竹田委員：保育科・こども総合学科について）
・私自身は在校時、楽しく通っていたが、それは授業で学ぶことが将来の役に立つと思っていたからである。将来を見据えて登校することが前向きに学校に通うことにつながると思う。（永井委員：保育科・こども総合学科について）
・通信制高校の指導として、今まで通信制高校は「来るだけでえらい」という指導をしていた。しかし、最近は学生のポテンシャルが変化してきたこともあり、「来るのは当たり前」という指導へ変わってきた。その状況に合わせて、当たり前の基準を変えていく必要がある。高校生にも、専門学校に進学すると当たり前の基準は変わってくるということは伝えている。（有山委員：介護福祉科・保育科・こども総合学科について）

(6)教育環境

【評価項目】（評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1）	評価
施設･設備は、教育上の必要性に十分対応できるよう整備されているか	4
学内外の実習施設,インターンシップ,海外研修等について十分な教育体制を整備しているか	3
防災･安全管理に対する体制は整備されているか	4

① 課題

学外実習では、体調不良などを理由に実習が途中で中止されたり、延期（補填）対象となる学生が一定数発生している。

② 今後の改善方策

学内での事前実習指導の強化

【介護福祉科】

実習スケジュール調整を行い、事前に指導に十分な時間を確保できるようにする。

【保育科】

実習年間スケジュールの変更、実習園へ学生の事前情報共有を行う。

③ 特記事項

特になし

⑤ 学校関係者評価委員会コメント

･事前に実習担当者からも現場にヒアリングをしたが、現場から何か実習生に求めるようなことはない。ただ、実習の機会は限られており大切な時間である。自ら何か行動をするハードルは高いと思うが、そのハードルが下がるよう、互いに意識できればと考えている。受け入れ側としては、実習期間中は常に同じ指導者が担当できることが望ましいが、シフト上難しい部分もあることは理解してほしい。（松縄委員：介護福祉科について）

･毎年、東京未来大学福祉保育専門学校から実習生を受け入れているが、いつも個性豊かな学生が来るので職員一同楽しみにしている。実習生にとって一番負担に感じるのはやはり日誌だと思っており、その時間を確保してあげることが園としてできることだと思う。当園では、実習生には休憩時間の 1 時間に追加して日誌作成のための 1 時間を与えていて、実習時間内で日誌も書くことができるようにしている。（竹田委員：保育科･こども総合学科について）

(7)学生の受入れ募集

【評価項目】（評価＝適切：4、ほぼ適切：3、やや不適切：2、不適切：1）	評価
学生募集活動は、適正に行われているか	4
学生募集活動において、教育成果は正確に伝えられているか	3
入学選考は、適性に行われているか	4
学納金は妥当なものとなっているか	4

① 課題

留学生の入学試験において、日本語力を適正にはかることができる筆記試験を導入したことにより、その質を担保できるようになった。入学意欲が適切に判断できることとなり、昨年度の課題は改善された。

保育科・こども総合学科の入学希望者数が微減となり、若年層への保育の魅力の周知浸透が不足していた。

② 今後の改善方策

中学生や高校生 1 年生など早いタイミングでの職業理解に努める

③ 特記事項

特になし

④ 学校関係者評価委員会コメント

特になし

(8)財務

【評価項目】（評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1）	評価
中長期的に学校の財務基盤は安定しているといえるか	4
予算･収支計画は有効かつ妥当なものとなっているか	4
財務について会計監査が適正に行われているか	4
財務情報公開の体制整備はできているか	4

① 課題

【中長期計画】

なし

【予算･収支計画】

なし

【会計監査】

なし

【財務情報の公開】

なし

② 今後の改善方法

【中期計画】

なし

【財務情報の公開】

なし

③ 特記事項

2025 年度は第3期中期経営計画(2023 年度～2027 年度)の 3 年目にあたり、東京未来大学及び小田原短期大学の中期計画改定を反映し、第3期中期経営計画＜第 2.0 版＞を策定し年度開始時より適用した。中期経営計画及びその進捗状況はホームページ上に公開している。

④ 学校関係者評価委員会コメント

特になし

(9)法令等の遵守

【評価項目】（評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1）	評価
関係法令、専修学校設置基準等の遵守と適正な運営がなされているか	4
個人情報に関し、その保護のための対策がとられているか	4
自己評価の実施と問題点の改善に努めているか	4
自己評価結果を公開しているか	4

① 課題

特になし

② 今後の改善方策

特になし

④ 特記事項

特になし

④ 学校関係者評価委員会コメント

特になし

(10)社会貢献・地域貢献

【評価項目】（評価＝適切：4、ほぼ適切：3、やや不適切：2、不適切：1）	評価
学校の教育資源や施設を活用した社会貢献・地域貢献を行っているか	4
生徒のボランティア活動を奨励、支援しているか	3
地域に対する公開講座・教育訓練（公共職業訓練等を含む）の受託等を積極的に実施しているか	4

① 課題

学生ボランティア活動の実績をより積み重ね、地域貢献につなげる。

② 今後の改善方策

園児を招いての地域イベントの開催や、学生主体で行う行事等を通して地域との連携を深めると共に、学生の学びをアウトプットできる場を創成していく。

③ 特記事項

【保育科】

・地域の保育園等にイベントのご案内を配布しており、地域の親子対象に月一回開催しているみらいキッズへの動員増と学校の認知拡大を図っている。

・近隣の保育園の園児を招いて、ハロウィンイベントやお店屋さんごっこ、子どもたちと一緒に奏でる音楽会などを開催している。

【介護福祉科】

チャレンジドヨガの継続、葛飾ろう学校との連携、介護施設や老人福祉施設へのボランティア活動を通して、学生の地域・社会貢献活動を支援している。

【職業訓練】

東京都の委託を受けて保育科・介護福祉科において職業訓練を実施。

2025 年度は資格取得 100%、就職率 100%

④ 学校関係者評価委員会コメント

・様々な学校から実習生を受け入れて感じるのは、学校によって学生の色が全く違うということである。知識は豊富でも、実践は苦手で子どもへ声のかけ方がわからず、上手く関わることができない学生もいる。東京未来大学福祉保育専門学校の学生は、実践に強く、子どもと関わることを楽しむことができる学生が多い。それは、実際に園児を招いての授業やイベントを頻繁に行い、実践に近い場を用意しているからだと思う。実習や現場に出てから歓迎されるのは、知識の豊富さよりも、いかに子どもと楽しく関わることができるかである。ぜひ、これからも実践で生きる指導を続けていただきたい。（竹田委員：保育科・こども総合学科について）

（11）国際交流（必要に応じて）

【評価項目】（評価＝適切：4、ほぼ適切：3、やや不適切：2、不適切：1）	評価
留学生の受入れ・派遣について戦略を持って国際交流を行っているか	3
受入れ・派遣、在籍管理等において適切な手続き等がとられているか	4
学習成果が国内外で評価される取組を行っているか	3
学内で適切な体制が整備されているか	3

① 課題

2025 年度はキャリアデザイン科の留学生数が大幅に増加したことで、在籍管理等においては適切な手続きを進めるまでに時間がかかってしまうことも多かった。学内での体制はまだ十分とは言えない。

② 今後の改善方策

・入学試験時の日本語能力の見極めの強化と、入学後の日本語能力フォローの強化、また在学中の日本語能力試験受験については引き続き積極的に促しを行っていく。

・JLPT 合格率向上のため、法人全体の取り組みとして JLPT 模擬試験（無料）の実施を行う。

・スピードビザ（留学生の学生管理システム）の導入により、在留期間および在留更新手続き管理のスリム化を図る。

③ 特記事項

特になし

③ 学校関係者評価委員会コメント

・留学生の実習生を受け入れることもあるが、取り組む姿勢や記録の面において、留学生だからといって特段劣るというようなことはない。もちろん、言葉や文化などの面で日本人と全く同じとはいかないが、どの実習生もまじめに取り組んでくれているように思う。それは学校での事前指導がしっかりとなされているからだと思う。留学生へのフォローはこれからも続けていただきたい。（松縄委員：介護福祉科について）

4. 学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

学校評価について、学校関係者評価委員からは概ね適切であるとの評価をいただいた。

今年度、全国で保育士育成施設の募集停止が続いており、介護も保育も養成施設が縮小傾向にある。しかしどちらも社会インフラとして必要不可欠な存在である。その人材を育成していくため、介護・保育の魅力を伝えていくことも学校としての使命だと考えている。そのためには、高校生だけではなく中学生や小学生などの若年層に対しても職業理解の機会を作っていく必要がある。

その中で、選ばれる学校でいるためには教育の質の担保が最重要である。必要な資格が取れること、望んだ先に就職ができること。この二つの柱はぶれることなく持ち続けなくてはならない。

地域や社会とのつながりを意識した学習機会を増やすことで、現場で活躍できる人材を育成していく。また、就職指導の時期を早めることで、納得のいく就職をし、早期離職を防止できるようなサポートを今後も行っていく。